

# 中国南北朝仏教における一乗思想

## 『涅槃経』を中心として――

藤井教公

### 一 はじめに

中国仏教においては一乗思想についての議論は、鳩摩羅什による『妙法蓮華経』の訳出以後に『法華経』所説の一乗思想を中心にしてなされてきたといつてよい。それは端的にいえば三乗方便一乗真実という成句で表現され、一乗（一仏乗）が皆成思想の根底に据えられていた。ところが慈恩大師基の唯識法相宗では一分不成仏を認め、三乗真実一乗方便を主張した。そしてその論争は日本仏教にまで持ち越されたことは周知の通りである。

ところで一乗思想を説く經典は『法華経』だけではない。『勝鬘経』においても一乗思想は経の主要なテーマとなっている。また、曇無讖訳の大乗『涅槃経』にも一乗が三乗と対比的に説かれており、中国仏教における同経の流行とともに経の一乗思想も受容されていた。本稿では中国南北朝仏教において大乗『涅槃経』の一乗思想がどのように受容されていたのか

ということを検討し、それによって同経受容の一側面を探りたい。

### 二 大乗『涅槃経』の一乗説

まず大乗『涅槃経』における一乗説とはどのようなものかを検討しよう。漢訳の大乗『涅槃経』の現存テキストには、法顕訳六卷本、曇無讖訳四十卷本（北本）、その修治本である三十六卷本（南本）、若那跋陀羅訳の『大般涅槃経後分』二巻がある。一乗説が説かれているのは北本（及び再治本の南本）であり、法顕訳六卷本には説かれていない。<sup>(1)</sup> 本稿では漢訳大乗『涅槃経』としてもっとも整備され、諸注釈がすべてこれに拠っている三十六卷本を用いて検討することにする。

#### ① 「一乗」と「三乗」

まず「一乗」と「三乗」について、経は次のように説く。

復た次に善男子よ、本有と言うは、我、初めて阿耨多羅三藐三菩提を得し時、諸の鈍根の声聞の弟子有り。鈍根の声聞の弟子有るを以ての故に「一乗の実を演説するを得ず。本無と言うは、本と利根の中の人象王迦葉菩薩等無し。利根の迦葉等無きを以ての故に宜しきに随つて方便して三乗を開示す。もしは沙門、もしは婆羅門、もしは天、もしは魔、もしは梵、もしは人有りて、説いて「如来は、去・来・現在に畢竟じて三乘法を演説したもう」と言うは、是の処有ること無し。 (梵行品、大正一一・七〇七下)

右の例では、仏は成道後の説法の対告衆には鈍根の声聞しかなかったために一乗真實の法を演説することができなかつた、また迦葉菩薩などの利根の菩薩がいなかつたので、随宜の方便として三乘法を説いたのだという。ここでいう三乗の内容は声聞乗・縁覺乗・菩薩乗であることは、金剛身品中の例から知ることができる。<sup>(2)</sup>とすれば、『法華經』でいう一乗真實・三乗方便説と全く同趣旨であることが知られる。もう一例を挙げよう。

善男子よ、如来は普く諸の衆生の為の故に、諸法を知ると雖も、説いて知らずと言ひ、諸法を見ると雖も説いて見ずと言う。有相の法を説いて無相と言ひ、無相の法を説いて有相と言う。実には無常有るを説いて有常と言ひ、実には有常有るを説いて無常と言う。我樂常等も亦た復た是くの如し。三乗の法を説いて一乗と言ひ、一乗の法を宜しきに随つて三と説く。 (同前書、同頁)

また、菩薩が大乗『涅槃經』を修するに際しての心構えとして次のように説く。

善男子よ、菩薩摩訶薩は大涅槃微妙經典を修するに、初めて五事を発して咸く成就することを得。何等をか五と為す。一には信、二には直心、三には戒、四には親近善友、五には多聞なり。云何なるをか信と為す。菩薩摩訶薩、三宝の施において果報有りと信じ、二諦において一乗の道より更に興趣無きに、諸の衆生速かに解脱を得るために、諸仏菩薩は分別して三と為すと信じ、第一義諦を信じ、善方便を信ず。是れを名づけて信と為す。 (高貴徳王品、大正一一・七五一上)

右の諸例から明らかなように、大乗『涅槃經』も『法華經』と同じく一乗真實・三乗方便を説いている。それでは『涅槃經』にいう「一乗」とは具体的にどのようなものであろうか。經は次のようにいう。

善男子よ、畢竟に二種有り。一には莊嚴の畢竟、二には究竟の畢竟なり。一には世間の畢竟、二には出世の畢竟なり。莊嚴の畢竟とは六波羅蜜、究竟の畢竟とは一切衆生の得る所の一乗なり。一乗とは名づけて仏性と為す。是の義を以ての故に、我は一切衆生に悉く仏性有りと説く。一切衆生に悉く一乗有るも、無明が覆うを以ての故に見ることを得る能わず。 (師子吼菩薩品、大正一一・七六九上)

このように、經は一乗とは仏性のことであると説く。一切衆生悉く仏性は『涅槃經』のモットーになっているが、仏性は一乗にはほかならないので一切衆生に悉く一乗有りとなる。一乗とは仏性であるとする説は、『勝鬘經』が一乗とは如来の法身であり、衆生における如来の法身を如来蔵と名づける

と説くことと軌を一にしている。<sup>(3)</sup>

大乘『涅槃經』では、「一乗」の語にのほかに「仏乗」「大乘」の語も用いられている。それらはどのような関係にあるかといえ、經に次のようにいう。

善男子よ、我、声聞の肉眼有る者の為に説いて降魔と言ひ、大乘を修学する人の為には説かず。声聞の人は天眼有ると雖も故(ことさら)に肉眼と名づく。大乘を学する者は肉眼有ると雖も乃ち仏眼と名づく。何を以ての故に。是の大乘經を名づけて仏乗と為す。此くの如き仏乗は最上最勝なればなり。

(四依品、大正一二・六三八上)

「是の大乘經」とは『涅槃經』のことを指すことはいまでもないが、それが仏乗であるという。すなわち大乘は仏乘にほかならない。以上のことからすると、大乘『涅槃經』においては一乗は仏乗、大乘と同義語であるということになる。それでは次に「三乗」とは具体的に何を指すのであろうか。次の例を見よう。

復た次に善男子よ、菩薩摩訶薩が慈心中において車乘を施す時、應に是の願を作すべし、「我、今、施す所、悉く一切衆生と之を共にせん。是の因縁を以て普く衆生をして大乘を成じ、大乘に住することを得、乗・不動転乗・金剛座乘より退かざらしめん。声聞辟支仏乘を求めず、仏乗・無能伏乘・無羸乏乘・不退没乘・無上乘・十力乘・大功徳乘・未曾有乘・希有乘・難得乘・無辺乘・知一切乘に向かわしめん」と。(梵行品、大正一二・六九七中)

ここではさまざま「乗」が説かれているが、人と教法に

中国南北朝仏教における一乗思想(藤井)

ついでに乗は、仏乗、大乘、声聞・辟支仏乗となる。ここでは声聞辟支仏の二乗を求めずに大乘を成じ、そこから仏乘に志向することが説かれている。ここでは菩薩乘という言葉はなく、大乘という語が使用されている。実はこのことは、この箇所だけでなく南本全体(もちろん北本も)を通じて言えることで、「菩薩乘」という語は使われていない。<sup>(4)</sup> 大乘『涅槃經』では三乗とは、仏乗(あるいは大乘)、辟支仏乗、声聞乗となる。

②二乗の扱いについて

大乘『涅槃經』において、声聞・辟支仏乗の二乗はどのように説かれているのであろうか。經は次のように説く。

復た次に善男子よ、無所得とは名づけて大乘と為す。菩薩摩訶薩は諸法に住せざるが故に大乘を得。是の故に菩薩を無所得と名づく。有所得とは名づけて声聞辟支仏道と為す。菩薩は二乗道を永断するが故に仏道を得。是の故に菩薩を無所得と名づく。

(梵行品、大正一二・七〇六下)

ここでは菩薩は大乘を得て、二乗道を永断するので仏道を得ると説かれていて、二乗道が厳しく否定されている。『法華經』では二乗は三乗の中の二乗として、方便としてその存在意義一応許容され、結果的に一乗に止揚されているのであるが、本經ではそうではない。涅槃についても二乗所得の涅槃と仏の涅槃との相違が説かれている。たとえば、

若し凡夫人及び声聞、あるいは世俗に因りあるいは聖道により、欲界の結を断じて則ち安樂を得。是くの如き安樂を亦た涅槃と名づくるも、名づけて涅槃と為すを得ず。（中略）何を以ての故に。還た煩惱を生じ、習氣有るが故に。云何が名づけて煩惱の習氣と為すや。声聞縁覚に煩惱の氣有り。所謂、我身、我衣、我去、我来、我説、我聽にして、諸仏如来は涅槃に入り、涅槃の性は無我、無樂にして、唯だ常・淨有り。是れを則ち名づけて煩惱の習氣と為す。仏・法・衆僧に差別の相有り。如来畢竟じて涅槃に入りたもう。声聞縁覚諸仏如来、所得の涅槃等しくして差別なし。是の義を以ての故に、二乗の所得は大涅槃に非ず。何を以ての故に。常樂我淨無きが故なり。常樂我淨は乃ち名づけて大涅槃と為すを得る也。（高貴徳王品、大正一一・七四六上）

とあり、声聞縁覚の二乗の得た涅槃は大涅槃とは言えない、なぜなら彼らには煩惱の習氣があるという。それは「我我所」と、涅槃には「我」と「樂」とが存在しないという思いこみだとする。そして常樂我淨という四つの徳性を大涅槃ということと説いている。この二乗の涅槃は不完全とする説は、『法華経』でも化城喩品に、二乗の涅槃は眞実のものでないと説いている。しかし、より説相として近いのは『勝鬘経』である。同経は二乗を徹底して批判し、彼らの涅槃を不完全なものとして排除している。そして、その原因として二乗には無明住地煩惱とその習氣による不思議変易生死があるからと説く。

以上のことからすると、経の二乗に対する扱いは、『法華経』のように二乗を包摂し、止揚するのではなく、二乗を批判し排

除する方向となつていくことが知られよう。となれば、経には三乗方便、一乗眞実の文句は見られるものの、『法華経』のような三乗を包摂し止揚する一乗説でなく、二乗廻心の一乗説といふべきものであろう。経には『法華経』の二乗作仏に関する言及があるが、その一乗説は『法華経』のそれよりも『勝鬘経』のものに近い。大乘『涅槃経』では一乗の根柢は仏性であり、それは大乘にほかならず、また仏乗ともされている。

### 三 中国仏教における『涅槃経』一乗説に対する理解

#### ① 『涅槃経集解』に見える解釈

さて、以上のような大乘『涅槃経』の一乗説に対し、中国仏教ではそれをどのように受容したのであろうか。『涅槃経』は中国仏教では広く受容され、同経を信奉し、研究する学派としての涅槃宗が成立した。そのなかで注疏類が多く作成されたが、南北朝時代を代表する疏が六世紀初めに編集された『涅槃経集解』七十一巻である。同疏は南本テキストに拠り、経文に対する道生を初めとして僧亮、僧宗、宝亮らの解釈を集めてある。<sup>(6)</sup>

いま、これによって南北朝時代、中国仏教における諸師の解釈を見ると、如来性品の経文、「仏言善男子如百盲人（至三指示之乃言少見）」に対する釈に次のようである。

案ずるに、僧亮曰く、「金罍は諸の経教を譬う。一指は三乗の諸経を譬う。三涅槃を説いて、実には一の常住涅槃を顕さんと欲す。文隠れて義微かに一指を譬うるなり。二は法花は二涅槃を破るを譬う。一乗は顕ると雖も常我は未だ明かならず。二指を譬うなり。三指とは、今日の仏性常樂の説を譬う。即便ち少しく見る者は見已わりて終に居すなり。終りは果を感じ、理彰かなり。説き已わりて便ち見る。始めは則ち事微かに説き難し。示すと雖も了せず。ここをもつて経は十地の菩薩を説く。見終われば始めを見ざるなりと。」

(大正一二・四六二下)

ここでは経が、一本の指ないし三本の指を盲人の前にかざし、指が多くなるほど見えやすくなるという譬え部分についての僧亮の解釈である。傍線部のように、一指を三乗教に譬えて、阿羅漢、縁覚、仏の三種の涅槃が実は一常住涅槃を顕そうとしたものだとし、二本の指は二乗の涅槃を否定するもので、まだ「常」と「我」とが説かれておらず、『法華経』がこれに相当するという。三指がこの『涅槃経』の仏性説と常樂(我浄)を譬えるものとしている。この例から僧亮の『涅槃経』に対する理解は仏性と常樂我浄の四徳であるということとがわかる。そして『法華経』は一乗を明かしているが、「常」と「我」が明かされていないとして、同経より『涅槃経』の価値を上においている。

次の例は、梵行品で先に引いた経文、「三乗之法説言一乗。一乗之法隨宜説三」に対する僧宗の解釈部分を挙げよう。

中国南北朝仏教における一乗思想(藤井)

案ずるに、僧宗曰く、「三を一と説くは三異なるの惑を破し、同帰の教を説くなり。一を三と説くは昔日の方便隨宜の教なり」と。

これは経文に忠実な解釈で、この解釈は『法華経』の一乗説にもそのまま当てはまるものである。ただし、ここでは三乗の内容についての議論はない。逆にこのことから、『涅槃経』の一乗説については僧宗にとって関心の埒外にあるように思われる。これは僧宗だけのことに限らず『涅槃経集解』全体を通じていえるように思われる。

次の例を見よう。師子吼品で、経の「善男子畢竟有二種」から「諸結覆故衆生不見」に至る部分(大正一二・七六九上)に対する解釈である。

案ずるに、僧亮曰く、「上に定んで菩提を得ると言う、畢竟得なり。今、但だ果を得るのみならず亦た因も得ると説くなり。莊嚴は是れ因、亦た是れ世間なり。「一乗とは仏智にして、是れ乗の究竟なり。乗の名を説くなり」と。僧宗曰く、「第四重に、因を借りて以て果を況するなり。莊嚴の畢竟は猶し因中に在り。衆生、因の理を成就せば豈に況や果性をや。生死の外に在りて当に修道を須いざるや」と。宝亮曰く、「第二問に答う。応に修道を須うべきを明かす。莊嚴の畢竟とは、謂く、金剛心なり。究竟の畢竟とは無学果なり。世間の畢竟とは、還た是の金剛心の時、体は未だ苦無常を免れざるに由るが故に、世間と言うなり。莊嚴の畢竟は万行に抛りて言を為す。究竟の畢竟は、衆生所得の仏果一乗を

道う。但だ衆生に此の仏果一乗有り。正しく無明の障覆するに由るが故に、理を見ること能わず。若し此くの如きんば急ぎ応に修道すべし」と。  
（大正三七・五五〇上—中）

最初の傍線部の僧亮の解釈、一乗は仏智であり、乗の究竟であるというのは通常の解釈であるが、次の傍線部、宝亮が「仏果一乗」という語を用いていることには注意が必要である。経は一乗とは仏性であると説いているが、仏性は仏となる可能性の意味で通常の解釈では仏因であつて仏果ではない。しかし、中国仏教では道生なども仏性を仏果と解釈する場合がある。<sup>(7)</sup>ここでの宝亮の解釈は、仏果＝一乗＝仏性となる。衆生の場合には、仏果たる仏性は無明に覆われてその理を見ることができない、という解釈である。

次の例は、先に引いた梵行品の「復次善男子。無所得者」から「是故菩薩名無所得」の部分に対する解釈で、経が菩薩と声聞辟支仏と対比してさせている部分である。

案ずるに、僧宗曰く、「第四に因中の行を以て相對す」と。宝亮曰く、「菩薩乗を以て二乗と相對す」と。  
（大正三七・五〇四上）

傍線部は宝亮の簡潔なコメントであるが、経は菩薩乗という言葉は用いていない。しかし、宝亮はこの言葉を用いていることから彼が三乗を声聞・縁覚・菩薩の三乗としていていることがわかる。これは『法華経』の一乗説と『涅槃経』のそれとの相違点を考慮することなく、無自覚的に『法華経』の一

乗説との類似性のみに着目した解釈を施している結果であるう。

これまで『涅槃経集解』の解釈の数例を検討したが、経の一乗説に対しての詳細な解釈は見られなかった。それは解者たちが、経の趣旨眼目は一乗説にでなく、如来常住説、仏性説にあると理解していることに大きな要因があると思われる。それは『法華経』の一乗説からの類似的解釈によって推し量ることができよう。それではそのような解釈は時代的経過とともに変化したのであろうか。この点について検討するために、次に章安灌頂の解釈を検討してみよう。

## ②灌頂『大般涅槃経疏』にみえる解釈

章安灌頂（五六一—六三三）は天台智顛の弟子で、智顛の著作は彼の編集によるものが多い。周知のように智顛は南北朝末期から隋初にかけての仏教者で、従来の『法華経』に対する『涅槃経』優位の理解を覆し、『法華経』至上主義に立つて天台教学を樹立した。<sup>(8)</sup>その智顛の著作中に『涅槃経』の引用援用は極めて多いが、灌頂は自身で『大般涅槃経疏』三十三巻を製している。<sup>(9)</sup>今、この疏によって灌頂による経の一乗思想についての解釈の典型例を紙数の関係から一つだけ挙げよう。如来性品の釈に次のようにある。

又「有帰依非真」の下、即ち自身、僧宝なり。問う、身に法僧

の爾るべきありて何すれぞ仏有らんや。答う、身中に仏性有り。仏性は即ち是れ法身仏宝なり。能く此の法即ち是れ法宝と説く。能く受持する者は即ち是れ僧宝なり。他に尚我身三宝に帰依す。我、今、あに自ら帰せざるべけんや。問う、三乗を会して一乗に帰す。一乗と名づくるは亦た応に三宝を会して一宝に帰するを名づけて一宝と為すや。若し三乗を会して一乗に帰さば三乗の異なり無し。三宝を会して一宝に帰さば、亦た三宝の異なり無し。

(大正三八・一〇六上)

ここでは、仏法僧の三宝について自身を僧宝、仏性を仏宝、仏性を説く法を法宝と解し、乗に関して会三帰一がいわれるならば、同じように仏法僧の三宝についても会三帰一が成り立って三宝の異なりはなくなるのではないかと問答を設けている。この解釈を見ると、『法華経』の一乗説をそのまま『涅槃経』解釈に適用しているのが知られる。これは一乗説については『法華経』の一乗説理解がそのまま用いられていて、『涅槃経』の一乗説に関してはあまり顧みられていないということである。ということとは、灌頂も一乗説に関しては前代に引き続き『法華経』のそれに強く影響されているということである。

#### 四 小結

これまで大乘『涅槃経』の一乗説について検討し、それが中国仏教者にどのように受容されているかということを見て

中国南北朝仏教における一乗思想(藤井)

きた。その結果を記せば、『涅槃経』の一乗説には三乗方便、一乗真実という『法華経』と同様の表現が見られるが、一乗説としては二乗廻心の一乗説といふべきで、むしろ『勝鬘経』の一乗説に近いことが確かめられた。

しかし、中国仏教における経の一乗説の受容は、『法華経』一乗説の影響の大きさと、『涅槃経』の趣旨を一乗説ではなく如来常住説、仏性説に見出そうとする態度のせいから、経の一乗説に関しては詳細な議論はなされず、『法華経』の一乗説をそのまま適用していることが確かめられたのである。

1 法顕訳六卷本には一乗、仏乗、三乗などの語が見られない。しかし、六卷本相当部分に対応する曇無讖訳前十卷部分には「一乗」「三乗」の語の用例が見られる。たとえば、「常行一乗。衆生見三。不退不転。断一切結」(大正二二・六三三上)、「善男子。声聞縁覚菩薩亦爾。猶如彼乳。所以者何。同尽漏故。而諸衆生言仏菩薩声聞縁覚而有差別。有諸声聞凡夫之人。疑於三乗云何無別。是諸衆生久後自解一切三乗同一仏性。猶如彼人解悟乳相由業因縁」(同前、六六四上)など。

2 前注の大正一二・六六四上の経文に、声聞・縁覚・菩薩の三者を挙げている。

3 求那跋陀羅訳『勝鬘経』には「声聞縁覚乗皆入大乘。大乘者即是仏乗。是故三乗即是一乗。得一乗者。得阿耨多羅三藐三菩提。阿耨多羅三藐三菩提者。即是涅槃界。涅槃界者即是如来法身。得究竟法身者。則究竟一乗。無異如来無異法身。如来即法身。得究竟法身者。則究竟一乗。究竟者即是無辺不断」(大正

一・二・三（下）とある。

4 ただし、前注1で挙げた後半の文例のように、人の区別としては声聞・縁覚・菩薩の区別を出しているが、菩薩乗とは言わない。

5 菩薩品「如法花中八千声聞。得受記前成大果実。如秋收冬蔵更無所作」（大正二・二六六一中）。

6 編者については異説があるが、建元寺法朗ではないかとされている。菅野博史「『大般涅槃經集解』の基礎的研究」（『東洋文化』第六十六号、一九八六年）参照。

7 このことについては、拙論「中国仏教における「仏種」の語の解釈をめぐって」（『東洋の思想と宗教』第十七号、一一一八頁、二〇〇〇年三月）を参照。

8 智顛の『涅槃經』の引用援用に関しては拙論「天台智顛における『涅槃經』の受容とその位置づけ」（一）―（三）（『大倉山論集』第二十三、二十四、二十七輯、一九八八、一九九〇年）を参照。

9 調卷は十五卷、十八卷のテキストもある。疏のテキストに関しては、拙論「『涅槃經』における仏性の中国的理解―灌頂の『涅槃經疏』を中心として」（『大倉山論集』第二十一輯、一九八七年）一〇二―一〇四頁参照。

〈キーワード〉 一乗、灌頂、『涅槃經集解』、『法華經』

（北海道大学大学院教授）

掲載されなかった諸氏の発表題目（一）

宋代天台安心観の変遷

林 鳴宇（駒澤大学非常勤講師）

東アジア仏教学（Ⅱ五台山系華嚴教学）からの天台・法華の一乗思想と立正安国への批判

小島 岱山（中国武漢大学栄誉教授）